

南半球便り（その 100）：豪・ニュージーランド関係

1 月 23 日

ニュージーランド (NZ) のアーダーン首相の辞任表明は、豪州でも大きなニュースとなりました。この機会に豪州人の対ニュージーランド観を印象論的に論じてみたいと思います。というのも、この南半球便りの読者の方からも、豪州と NZ の関係を教えて欲しいとのご質問を受けていたからです。

1. 兄弟仁義

多くの豪州人が一番身近に感じる外国は、今も間違いなく NZ でしょう。

シドニーにあるローウィー研究所の世論調査でも、豪州人が日本以上に親近感を感じている国としては、NZ、カナダ、英国という結果が出ているようです。基本的価値に加えて、言語、文化、生活様式等を共有していることの重みでもあります。

歴史をひもといても、英国を中心とする欧州からの入植者が原住民との争いを経て開拓を進め、現在の国の成り立ちの基盤を作ったという意味でも、共通項があります。共に英連邦の重要な一員。英国とのつながりの深さは、両国の国旗からも明らかなとおりです。

私が 20 年ほど前にジュネーブの代表部で貿易交渉に勤しんでいた時、両国とも農業輸出国としてケアンズグループの主要メンバー。日本の農業市場の開放を声高に求める強硬派でした。コメや牛肉での豪州との熾烈な交渉が終わっても、NZ との厳しい乳製品の交渉が残っていたというのが、良くある図式。なので、どうしても一体化して捉えがちです。



2022 年ローウィー研究所による世論調査。

他国に対する豪州人の親近感を温度計で表示。



豪州国旗



NZ 国旗

どちらも英連邦を示すユニオンジャックと南十字星を主なデザインにしているが、星の数・形・色など違いがある。豪州国旗の一番大きな星は、コモンウェルス・スターと呼ばれるもの。

2. サイズの違い

まずは圧倒的に違うのがサイズです。

豪州の人口は約 2500 万人、国土は日本の 20 倍。これに対して、NZ の人口は約 500 万人、国土は日本の四分の三です。そのうちの約 60 万人が豪州に居住しているとの統計もあります。

したがって、豪州人の感覚では、規模的には、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、クイーンズランド州など、連邦制の豪州内に 6 つある州と同格といった見方があるようです。実際にそういう発言をする豪州人に接したこともあります。

また、日本では豪州、NZ 共に「ファイブ・アイズ」の一角であることが良く意識されていますが、豪州の専門家の中には、米・英・豪・加といった他のメンバーが扱うインテリジェンスとの質・量での違いに着目し、「フォー・アイズ・プラス・ウイंक」という形容をする人もいます。むろん、NZ 側にとっては、面白くない話でしょう。



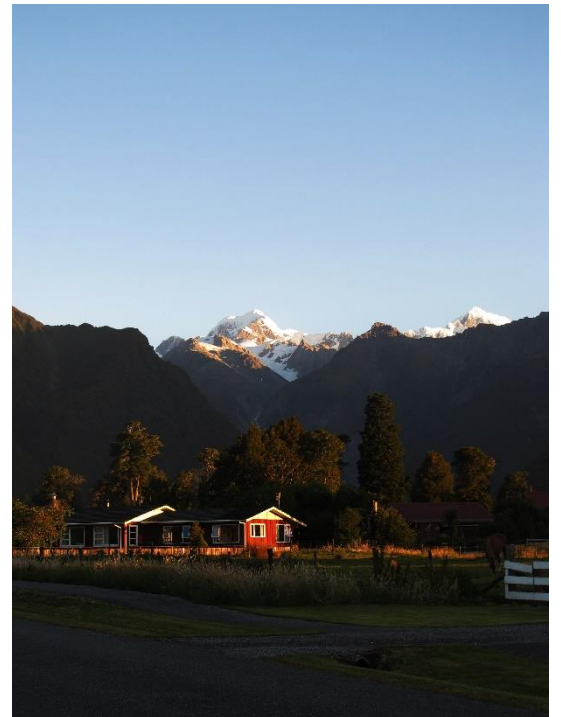
圧倒的に国土のサイズが異なる豪州と NZ

(出典：グーグル・マップ)

3. 憧憬

同時に、豪州にない良さをいくつも持っているとして、NZ に対して憧れに似た思いを持っているオージーにも数多く会ってきました。

4000 メートル級の雪山を始め、変化に富んだ景色と国土は、豪州大陸とは趣を異にし、豪州からも多くの観光客が NZ を訪れます。豪州と同様に偉大なスポーツ国家であることも一目置かれており、特にラグビーで超強力なオールブラックスにワラビーズが勝つことは、オージーの悲願でもあります。



当館の豪州人館員が撮影した NZ 旅行の写真。
豪州大陸とは異なる景色に豪州人も引きつけられる。

第一次大戦中に ANZAC 軍と称して、豪州、NZ から出征した兵士が共にガリポリや欧州戦線で血を流したことなど、歴史の節目で協働してきたことも大きな要素でしょう。私が出席した毎年 4 月 25 日の ANZAC デーのセレモニーでは、豪州首相と駐豪州 NZ 大使の二人が式の主役を務めていたことが印象的でした。

4. 戦略環境の変化への適応

そうした中で、双方において、現在の課題として意識されているのが、南太平洋、さらにはインド太平洋で生起している地殻変動のような大きな戦略環境の変化に対して如何に対応していくかという問題です。NZ にとって最大の貿易相手国が豪州から中国に変わったというのも、環境の変化の一端です。

豪州が、クアッド、さらには AUKUS といったイニシアティブに自ら加わり、或いは積極的に主導してきたことは、この便りでもたびたび取り上げてきたとおりです。これに対して、NZ はどう対応していくのかという問題もあります。

1980 年代のロンギ政権の際、反核態度を公に打ち出して米軍艦船の寄港を拒否し、同盟関係のあり方が大きな議論的となったことは記憶に新しいかもしれません。一昨年の AUKUS 創設に際しても、豪州が今後導入する原子力推進潜水艦の NZ 領海への進入を拒否するという議論が起きています。

ソロモン諸島をはじめとして、南太平洋島嶼国の安全保障を如何にして確保していくのかという観点からも、豪州と NZ、さらには日本や米国との戦略環境認識の摺り合わせは今まで以上に重要になっています。

5. 「できの良い弟」

このように観てくると、日本から観ていた豪州・NZ 関係とは違った様相が見えてくるのではないのでしょうか？

実際、国際社会で注目を集めてきたアーダーン首相の突然の辞任表明に際しての豪州各界の反応はなかなか興味深いものでした。NZ 労働党出身の首相であっただけに、中道左派系の主要紙はアーダーン首相の功績を高く評価し、その辞任を惜しむ論調が顕著でした。一方で、保守連合に近い中道右派系のジャーナリストや財界人からは、痛烈な辛口の評価を耳にすることも珍しくありませんでした。



アーダーン首相と岸田総理との日 NZ 首脳会談（2022 年 4 月、東京）
（出典：内閣広報室）

距離的には 2000 キロ離れているとは言え、心理的に近く、政界を始め各界の交流も深い両国関係。そうした背景があってこそ、いわば近親感情に基づく反応であるように思いました。

そう言えば、ある豪州人がこう言っていました。

「キウイ（NZ 人の別称）は、できの良い弟。ハンサムで見栄えも良い。でも、家の面倒は兄貴のオージー任せに見ようとしな。これが豪州人の NZ 観だ。」

「当たらずといえども遠からず」なのでしょうか？

是非、南半球の味わい深い両国を訪問して実感してみてください。

山上信吾